大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『徒然草』第四一段考：棟の上で眠る法師

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池上, 保之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017076

『徒然草』第四一段考――棟の上で眠る法師――

池上保之

はじめに

『徒然草』第四一段は次のような章段である。

五月五日、賀茂の競馬を見侍りしに、車の前に雑人立ち隔てて見えざりしかば、おのおの下りて、埒の際に寄りたれど、ことに人多く立ち込みて分け入りぬべきやうもなし。

かかる折に向ひなる棟の木に法師の登りて木の股についゐて物見るあり。取りつきながらいたう睡りて、落ちぬべき時に目をさますこと度々なり。これを見る人、あざけりあさみて、「世のしれものかな。かく危き枝の上にて、安き心ありて睡るらんよ」と言ふに、我が心にふと思ひしままに、「我等が生死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて物見て日を暮す、愚かなることはなほまさりたるものを」と言ひたれば、前なる人ども、「まことにさにこそ候ひけれ。もつとも愚かに候」と言ひて、皆、うしろを見返りて、「ここへ入らせ給へ」とて、所を避りて、呼び入れ侍りにき。

かほどの理、誰かは思ひよらざらんなれども、折からの思ひかけぬ心地して胸に当りけるにや。人、木石にあらねば、時にとりて物を感ずることなきにあらず。

五月五日、賀茂神社の競べ馬を見物しようと、兼好は数人で牛車に乗り出かけた。会場は既に混雑しており、とても牛車からは見ることができない。各々降りて埒の近くへ寄ろうとしたが、人が多すぎて分け入ることもできなかった。そんな時、埒を挟んで向こう側の棟の木の上に、高いところから見物しようとして木に登った法師が見えた。木の股に座り、居眠りをしており、落ちそうになると目を覚ますといった有様であった。それを見た見物人

たちは口々に、「世にも稀な愚か者である、あのような危うい枝の上で、安楽な心地で眠っているなんて」と罵った。そこで兼好は心にふと思い浮かんだことを口にした。「我々の生死がいつ訪れるか、今この瞬間かもしれない。それを忘れて物見をして日を暮らしている、愚かなことはあの法師よりもいっそうまさっているのではないか」と。すると、それを聞いた前方の見物人たちは「本当にその通りでしょう。我々の方こそ愚かなことです」と言って、兼好の方を顧み、「ここへお入りください」と言って、場所を空けて呼び入れたのだった。このような道理は、誰だって思いつかないことではないが、折節思いもかけないことで、ハッと胸に当たったのであろうか、人は木石ではないので、時によって物を感じることがないわけではないのである、と兼好は感想を述べている。

さて、本段は直接体験の過去の助動詞「き」が用いられ、兼好の体験を記した章段であると捉えられる。ただ、本段では、従来、この出来事が実体験であるか、虚構であるかが問題とされてきた(1)。この点について稲田利徳氏は次のように指摘される。

私は、作者の実体験の叙述スタイルをとる章段を、そのまま伝記的な事実だと短絡させる方法は、あまりにも素朴であり、慎重な態度で対処すべきだと思う。

この第四十一段でも、これに類似の体験はあったろうが、「人生は木の股に腰かけていねむりをしているものだという比喩になりそうな事柄」を軸にして、当日の状況や群衆の態度などの叙述面に、種々の虚構も加えられ、ドラマチックに構成されていると予測される。(2)

一段は何かしらの核となる体験があったとしても、兼好が創作した部分も含む章段であると捉えられている。首肯すべき見解だと考える。

ただ、この章段がどの程度まで事実に基づき、どの程度虚構であるのか、ということは、もはや可能性の域を出ない議論に終始するものと思われる。そこで、より重要なことは、この話を兼好が自身の体験談の形で記しているということだろう。本稿では、その点を重視し、兼好の体験を記した章段として論を進める。もちろん、それが完全な実体験であったと考えているわけではない(3)。

さて、本段は有名な章段であるが、なお検討すべき点もあるように思われる。それらの点について、先行研究も参照しながら、再読を試みたい。

一　鳥窠禅師

諸注、指摘するところであるが、本段の兼好の意識の中には「鳥窠禅師」の逸話があったものと考えられる。早くは寛文元年（一六六一）刊、高階楊順『徒然草句解』に次のように指摘される。

又案するに　此段鳥窠禅師の故事思合せ見るへし。五灯会元ノ二ニ曰、鳥窠道林禅師ハ本郡富陽ノ人。秦望山ニ有リ二長枝一枝葉繁茂盤屈如レ蓋ノ。遂ニ棲二止ス其上ニ一。故ニ時ノ人謂フ二之ヲ鳥窠禅師ト一。元和中ニ白居侍郎入テレ山ニ謁シレ師ニ問テ曰、禅師ノ住処甚タ危険ナリ。師ノ曰、太守ノ危険ナルコト猶甚シ。白カ曰、弟子位鎮ムニ江山ヲ一。何ノ険ナルコトカ之有ラン。師ノ曰、薪火相交リ識性不レ停マラ。得ンヤレ非ルコトヲレ険ニ乎。

中国唐の僧、道林禅師は後年、秦望山の木の上に暮らし、遂に地上に降りることはなかったため、鳥窠（鳥の巣）禅師と称された。ある時、太守となって赴任していた白居易が禅師に、木の上に住むことは甚だ危険であると忠告すると、禅師は、危ういことはお前（白居易）の方がまさっているぞ、と反論したのだった。

僧が木の上にいる点が本段と同じであり、また、木の上にいることが危ぶまれている点も通うと言える。この逸話は諸書に見え、『句解』の指摘する『景徳伝灯録』巻四には次のようにある(4)。

前杭州徑山道欽禪師法嗣

杭州鳥窠道林禪師。本郡富陽人也。姓潘氏。母朱氏夢日光入口。因而有娠。及誕異香滿室。遂名香光焉。九歲出家。二十一於荊州果願寺受戒。後詣長安西明寺復禮法師。學華嚴經起信論。復禮示以眞妄頌俾修禪那。師問曰。初云何觀。云何用心。復禮久而無言。師三禮而退。屬唐代宗詔徑山國一禪師至闕。師乃謁之遂得正法。及南歸先是孤山永福寺有辟支佛塔。時道俗共爲法會。師振錫而入。有靈隱寺韜光法師。問曰。此之法會何以作聲。師曰。無聲誰知是會。後見秦望山。有長松枝葉繁茂盤屈如蓋。遂棲止其上。故時人謂之鳥窠禪師。復有鵲巢于其側自然馴狎人。亦目爲鵲巢和尚。有侍者會通。忽一日欲辭去。師問曰。汝今何往。對曰。會通爲法出家。以和尚不垂慈誨。今往諸方學佛法去。師曰。若是佛法。吾此間亦有少許。曰如何是和尚佛法。師於身上拈起布毛吹之。會通遂領悟玄旨。元和中白居易出守茲郡。因入山禮謁。乃問師曰。禪師住處甚危險。師曰。太守危險尤甚。曰弟子位鎮江山。何險之有。師曰。薪火相交識性不停。得非險乎。又問如何是佛法大意。師曰。諸惡莫作衆善奉行。白曰。三歲孩兒也解恁麼道。師曰。三歲孩兒雖道得。八十老人行不得。白遂作禮。師於長慶四年二月十日。告侍者曰。吾今報盡言訖坐亡。壽八十

有四。臘六十三（有云師名圓修者。恐是誤脱）

本朝においては、『沙石集』巻第五本ノ五に見える。

大唐の道林禅師、秦の望山の長松の上に居たりしかば、時の人、鳥窠禅師とぞ云ひける。侍郎白居易、その国の守たりし時、行きて問ひて云はく、「禅師の居所、危くこそ」と云ふ。禅師云はく、「我れに何の危き事かあらむ。侍郎の危き事は、これよりも甚し」と云ふ。侍郎云はく、「弟子、江山を宰る。何の危き事かあらむ」。師云はく、「薪火相交はり、識性とどまらず。何ぞ危き事なからん」。侍郎云はく、「如何なるか是仏法の大意」。師云はく、「諸悪莫作、衆善奉行」。侍郎云はく、「三歳の孩児もかくの如く云ふ事を知れり」。師云はく、「三歳の孩児も云ふことを知れども、八十の老翁も行ずる事を得ず」と。

実に仏法の大意、皆その趣異らず。顕密禅教、方便且く分れたれども、諸悪莫作、衆善奉行の教へ、かはるべからず。然るに、近代の仏法、無礙の邪見多くして、仏眼の照らす所の無礙の言を、妄執の煩悩の性、無自性なる故を悟らず、しひて道理を立てて、妄業をつくる事のみ多し。「諸悪莫作の教へにたがはば、真の仏法にあらず」と、古徳の口伝にあり。用意すべし。

以上のように鳥窠禅師の逸話は、兼好の時代にも知られたものであったと考えられる。兼好と話をした見物人たちまでもが理解したとは到底考えられないが、兼好の脳裏にこの話が浮かんでいたことは間違いないだろう。そのことから、本段は、この逸話を元に兼好が創作した章段であるとする解釈もある(5)。ただ、注意しておきたいことは、本段と『沙石集』等に見える鳥窠禅師の話とでは、相当隔たりがあるということである。

鳥窠禅師の逸話では、白居易が禅師に問いかけ、木の上の禅師自身が反論している。一方、『徒然草』においては、法師を危ぶんだ見物衆に対し、同じ地上にいる兼好が、つぶやくように(6)後ろから声を発したのである。また、『沙石集』などに載る鳥窠禅師の問答は、直接生死の問題とは関わらない。白居易は仏法の大意を訪ねるが、その答えは「諸悪莫作、衆善奉行」（諸々の悪をなさず、多くの善をなす）であった。仏教のあらましについての問題に展開しており、『徒然草』のように生死の問題を話し合ったわけではない。よって、共通する部分は、木の上に僧形の人物がいたという点だけしかないとも言えるのではないか。

兼好は、しばしば過去の逸話と自身の体験が通う瞬間を『徒然草』に記しているが(7)、本段でも、兼好の脳裏に鳥窠禅師の逸話があり、賀茂競馬の場でそのことを想起したものと考えられる。

しかし、それだけで本段が書かれとは考えがたく、なお別の要素が必要なように感じられる。本段を記す動機となった要因は、他にもあるのではないか。

そこで、改めて鳥窠禅師の逸話との差異を確認しておこう。兼好はなぜ「生死の到来」ということについて述べたのだろうか。それは、もちろん眼前にいる法師が、高い木の上で居眠りをしており、落ちて死ぬかもしれない、という状況がある。だが、やはり兼好の発言は、かなり唐突なものであったと思われる。

なぜ兼好はかかる発言をし、さらに周りの人々に受け入れられたのだろうか。そこにはこれまで見落されてきた何か別の要因があるのではないか。兼好や見物人には自明のことが、我々には見えづらくなっているのではないか。そこで季節やディティールから見直してみたい。

二　五月五日の楝

まず注目したいのが楝の木である。楝は栴檀科の落葉高木であり、初夏に薄紫色の花を咲かせる。折しも賀茂競馬はその時期にあたるのである。寛文七年（一六六七）刊、北村季吟『徒然草文段抄』以来指摘されるが、『枕草子』には次のようにある。

木のさまにくげなれど、楝の花、いとをかし。かれがれにさまことに咲きて、かならず五月五日にあふもをかし。（『枕草子』三五「木の花は」）

このことは諸注釈書でも指摘されてきた。例えば、安良岡康作氏は次のように述べられる。

幹の高さは三丈にも達する。陽暦四月ごろ、淡黄色の小花をつける。『枕草子』（前田家本）の「木の花は」の段には、「木の花ぞにくけれど、あふちの花こそいとをかしけれ。こと木の花にはさまことに咲きて、必ず五月五日にあふもをかし」とある。本段の楝も、花をつけていたものと想像される。(8)

『枕草子』を指摘し、『徒然草』本段の楝の木にも花が咲いていたものとされる。また、三木紀人氏は次のように述べられる。

兼好らのいた埒のあたりからは、馬場をへだてて向う側に立っている楝の木。楝は栴檀（「二葉よりかんばし」といわれる香木とは別）の古名。落葉高木で、その高さは七メートルに及び、この場面のように展望を得るために用いるのにふさわしい。陽暦五月中下旬から六月はじめにかけて淡紫色の花を多くつけるので、ここは、散りぎわの花とともに思い描くべきところである（陰暦五月五日は、陽暦六月十日前後）。五月五日の風物とされたことは、『枕草子』の「節は五月五

日にしくはなし。……紫の紙にあふちの花、青き紙に菖蒲をほそうまきてひき結ひ」、「木のさまぞにくけれど、あふちの花こそいとをかしけれ。異木の花にはさまことに咲きて、かならず五月五日にあふ（咲き合せる）も、をかし」などによって知られる。また、『駿牛絵詞』の五月五日賀茂競馬見物の一節に、賀茂河原の風景にふれて「所々のあふちの花、折りえがほに咲き匂ふ。所どもの木かげ露落ち、みたらしの河風涼しくて、ゆきすぎがたければ」、また、「堤の北にあふち六七本並み立ちしたる下に、牛をまうけてかけかへんとす」とあり、『新撰六帖』に「道のべの賀茂の川原のふし拝み古木のあふち陰もなれにき」とあり、賀茂の風物の一ともされていたらしい。それらに見える初夏の清涼感もあわせ注意される。したがって、この法師の座した木は、単に実用的な面だけでなく、場所柄、季節感の点でも、いかにもこの日にふさわしいものだったわけで、法師の気持に風流心があったかなかったかは別として、棟の木の上で居眠りする彼の姿は、兼好にとっては珍重すべき点景だったはずである。(9)

『枕草子』や『駿牛絵詞』、『新撰六帖』の歌から、五月五日の賀茂の風物として、薄紫色の花が咲いた棟があったことを指摘される。そして、それは『徒然草』においても同様であり、法師は花の中で眠るという、見方によっては風流で、特異な情景であったことを喚起される。

このように『枕草子』の記述などを合わせて考えると、五月五日の賀茂の棟とは、時節柄ふさわしいものであった。法師が眠っていた木は何でもよかったわけではなく、棟の木だったのである。そして、五月五日、賀茂競馬の際の棟には、薄紫色の花が咲いていたと考えられるのである。よって、法師は薄紫色の花の中で眠っていたのである。まずこの視覚的なイメージを意識しておく必要があるだろう。

さらに、この棟の紫の花は仏教における瑞兆である「紫雲」に見立てられることもあったのである。この点について稲田利徳氏は次のように指摘されている。

棟は樗とも書き、俗に栴檀と称する落葉高木で、五～六月頃に淡紫色の花を開く。和歌の世界では「万葉集」に、山上憶良の著名な歌「妹が見し棟の花は散りぬべし」（巻五・七九八）ほか二首に取材されているが、八代集では「新古今集」の、

あふちさくそとものこかげ露おちて五月雨はるる風わたるなり　（夏・忠良・二三四）

五月ばかりに雲林院の菩提講にまうでてよみ侍りける

むらさきの雲の林をみわたせばのりにあふちの花さきにけり　（釈教・肥後・一九二九）

の二首だけで、あまり取材されなかった。この二首でも、ともに五月という月と関連していること、特に後者は棟の淡紫色の花を、阿弥陀来迎の時の紫雲と絡ませているのなどは、留意すべきであろう。(10)

稲田氏は、『新古今和歌集』の歌から、棟の花が阿弥陀来迎の際の紫雲に譬えられていることを指摘される。一九二九番歌は、釈教部の歌である。「紫の雲」は聖衆来迎の際の瑞兆であり、棟（おふち）と仏法に「あふ」との掛詞になっている。咲いた薄紫色の花々が、あたかも聖衆来迎の紫雲のようである、というのである(11)。棟の花は紫雲に見立てられることもあったのである。

以上、先行研究では、五月五日の棟の木には、紫色の花が咲いていたこと、紫の花は聖衆来迎の紫雲に見立てられていたことが指摘されていた。これらは重要な指摘であると考える。そして、これらの見解を、さらにもう一歩進めて考えてみたいのである。すなわち、この時、兼好や見物人の眼前には、紫の花の中に眠る法師がいたのだが、その様子はあたかも紫の雲に乗っているように見立てることができたのではないか、ということである。法師は、紫雲に乗り極楽往生を遂げる聖のように捉えられたのではないか。本段を読む際には、このような視覚的なイメージを持っておかなければならないものと考えるのである。

そうすると、目の前の愚かなる法師は、見え方だけは聖なる存在として認識されたのである。そして、このことが、兼好に「生死の到来」という人間の生死に関わる問題を持ち出させた理由であり、また、それを聞いた人々にも思いがけず納得される由縁となったものと考えるのである。

三　紫雲に乗る聖人

以上のような状況があったとするならば、兼好や見物人たちは、具体的にはどのような世界をイメージしたのだろうか。紫雲や、それに乗る存在について、絵画資料なども参照し、当時の意識を確認したい。

「紫雲」については、諸書に見えるが、例えば『平家物語』灌頂巻には次のようにある。

御念仏の声やうやうよわらせましましければ、西に紫雲たなびき、異香室にみち、音楽そらにきこゆ。かぎりある御事なれば、建久二年きさらぎの中旬に、一期遂に終らせ給ひぬ。

建礼門院の最期の時、西の空に紫雲がたなびき、室内には異香が

「としよりたまへる御身には、めでたく七百部まではよみ給へるものかな。のこりをば一向念仏になされ候べし」とて、念仏の功能をときゝかせられければ、其のちは法華経の読誦をとゞめて、一向専称してとし月をへて、すでに往生をとげにけり。丹後国志楽の庄に弥勒寺といふ山寺の一和尚なりける僧の、むかしは天台山の学徒、のちには遁世して上人の弟子となりて、一向に念仏して五条の坊門富少路にすみけるが、ひるねしたる夢に、そらに紫雲そびけり。なかに一人の尼あり。まことに心よげにうちゑみて、「われは法然上人のをしへによりて念仏して、只今すでに極楽へ往生し候ぬるぞ。これは仁和寺に候つる尼なり」と申とみて夢さめぬ。やがて上人のおはしましける九条なる所へ参て、「妄相にてや候らん、かゝるゆめを見て候」と申ければ、上人うち案じたまひて、「さる人あるらむ」とて、やがて仁和寺へ使をつかはされんとするに、日くれにければ、次のあしたつかはさる。「便宜のよしにて、『なに事か候』とたづぬべし」とおほせられければ、つかひかのところへむかひてたづね申に、「かの尼公は昨日午剋に、はや往生し候ぬ」とぞ答申ける。あはれにたうとき事にてぞありける。(13)

満ち、音楽が聞こえた。このことから女院が極楽往生を遂げたことが知られる。

このような「紫雲」について、千々和到氏は次のように指摘される。

すなわち、空に音楽が聞こえ、往生人のいる室内には異香が満ちる。そしてそれとともに、紫雲が立ちのぼり、西へと流れてゆく。これが典型的な往生の場面なのである。つまり、音楽と室内の香気とが阿弥陀来迎＝阿弥陀仏がそこに、往生人とともにいる、ということを感じさせ、一方、立ちのぼる紫雲が往生人が極楽にむかいつつあることを群衆に知らせる役割を果たしていると理解することができよう。(12)

聖衆の到来は音楽・香気によって表され、臨終を迎えた人物の往生を紫雲が表現しているとされる。紫雲に乗る者は、極楽往生を遂げているということになる。

このような場面は様々に絵画化もされている。例えば『法然上人絵伝』（図1）には、次のように詞書があり、絵画化される。

仁和寺にすみける尼、上人にまいりて申やう、「みづから千部の法華経をよむべきよし宿願の事ありて、七百部はすでによみをはれり。しかるにとしすでにたけ侍ぬ。のこりの功いかにしてをへ侍べしともおぼえ侍らず」となげき申ければ、

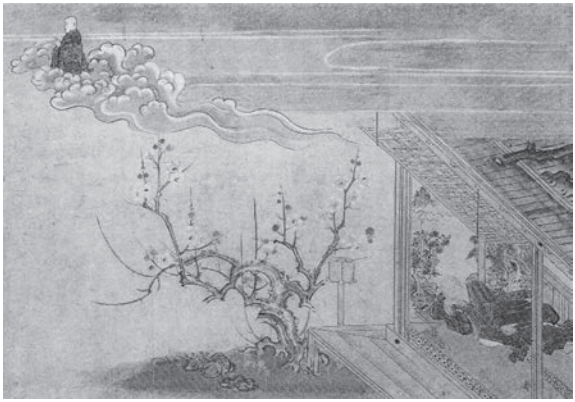

図1　紫雲に乗り極楽往生を遂げる尼

法然の弟子となった僧の夢に、紫雲に乗った尼が現れた。夢を見た同時刻に尼は臨終しており、極楽往生を遂げたことが知られる。夢の中での尼の表情は「まことに心よげにうちゑみて」という穏やかなものであった。その図像も紫雲に乗った僧形の尼が描かれている(14)。

兼好の生きた時代にも、このような図像は流布しており、兼好や見物人も、同様のイメージを共有していたものと考えられる。そのような中で、『徒然草』本段の法師の様子は、このような図像を想起させるものだったのではないだろうか。眼前の法師は見物のために木に登った愚かな存在であるのだが、そのヴィジュアルなイメージは、僧形の人物が紫色の花の中に心安く眠っており、あたかも紫雲に乗って極楽往生を遂げる聖人のようにも映ったと考えられるのである。

さらに、法師は木の上で極楽往生を遂げているように見立てられるわけだが、樹上の聖人の往生ということでは、次のような逸話もある。

『日本往生極楽記』二三

摂津国豊島の箕面の滝の下に、大きなる松の樹あり。修行の僧あり、この樹の下に寄居せり。八月十五日、夜閑にして月明かなり。天上に忽ちに音楽および櫓の声あり。樹の上に人ありて曰く、我を迎へむと欲するかといふ。空中より答へて曰く、今夜は他人のために他所に向ふなり。汝を迎ふべきときは明年の今夜なりといふ。また他の語なし。音楽漸くに遠ざかりぬ。樹の下の僧、初めて樹の上に人あるを知れり。

便ち樹の上の人に問ひて言はく、これ何ぞの声かといふ。樹の上の人答へて曰く、これ四十八大願の筏の声なりといへり。樹下の僧、竊に明年の八月十五日の夜を相待てり。期日に至りて、果してその語のごとし。微細の音楽、相迎へて去りぬ。

樹上にいた聖なる存在は八月十五日夜、妙音の響く中、極楽へ迎えられたのだった。紫雲についての記述はないが、雲中より音楽が響きわたっており、聖衆が来迎していることが分かる。よって、往生の際には空に紫雲がたなびいていたものと考えて不都合はない。あるいは、兼好は鳥窠禅師の逸話だけでなく、この話も想起していたかもしれない(15)。いずれにしても、樹上の法師というのは特異な存在であり、花の中に心穏やかに眠る様相には、ある種の聖性を見出すこともできたと考えられるのである。

以上、楝の紫色の花の中に眠る法師は、極楽往生を遂げている聖人のようにも理解された可能性を指摘した。紫雲に乗り、往生を遂げる様子は、当時の人々に共有されたイメージがあり、心安く眠る姿は、穏やかに臨終を迎えているように見立てることができる。

そして、この見立てこそが、兼好の「生死の到来」という発言を引き出した原因だったと考えるのである。法師は臨終を迎え往生するかのうように映っていた故に、生死の問題が提起された。少なくとも、この場面において兼好の発言は突飛ということはなかったのではないか。そして、見物人たちにも、とっさに受け入れられる結果になったのである。

四　兼好の発言の理由

最後に、兼好の発言の理由について考えてみたい。兼好がなぜ「生死の到来」という、生死の問題について発言したのかについては、楝の薄紫色の花の中に眠る様子が、紫雲に乗り往生を遂げる聖人のように見立てられたことによるものと考えられる。発言の内容については、それが引き出される視覚的な要因があり、全く唐突というわけではなかった。

しかし、兼好の発言が、その場に相応しいものであったかと言うと、やはりそうではあるまい。自身も含めて、その場に集まった者たちは、競馬を見物しに来ていたのであり、兼好の発言は人々の興奮を削ぐようなものであった。むしろ、場違いの発言だったとも言える。なぜ兼好はこの場面において、このような発言してしまったのだろうか。兼好の発言の真意について考えてみたい。

兼好が見物人たちに言った「生死の到来」の発言は、これまでも、その矛盾が指摘されてきた。兼好自身も競馬を見物に来てい

たのに、そのように見物して日を暮らすのは愚かなことだと、自分のことは棚上げしたような口吻で説教を垂れる。さらに、その発言に感じた前方の観客から席を譲られると、何のわだかまりもなく、その場へ入って見物した。このような言行の不一致が本段の奇妙な点として挙げられてきた(16)。

この点について、中野貴文氏は、木の上の法師を嘲った「これを見る人」とは見物人ではなく、兼好と牛車に同乗していた人たちだとされ、見物をしていた「前なる人ども」とは別人だと捉えられた。その上で、次のように指摘される。

ここで彼は、群集に向かって声高に叫ぶのではなく、ひとりまるでつぶやくように言葉を発し、その言葉が群集に届くことをさほど期待せずに静観する構えを示していた。同行者の存在は僅かに示されてはいるものの、否、僅かにではあっても示されているからこそ、それらの集団から自分だけ隔絶しているのだという点が強調されている印象を受ける。自分とそれ以外の者たちとの感覚の相違に敏感で、したがって彼らと安易に交じろうとせず、対話にも積極的でない。(17)

兼好の発言は声高に主張されたものではなく、聞かれなくてもよいというつもりでつぶやいたものだとされる。

「これを見る人」と「前なる人ども」が別人であるという点については、「これを見る人」が法師を嘲った発言と、「前なる人ども」の「まことにさにこそ候ひけれ」という発言は対応しており、その結果、兼好を招き入れるという一連の行動へと結実していると考えられる。よって、やはり「これを見る人」と「前なる人ども」は同一人物（集団）と見るのが妥当であると思われるが、兼好の発言の様子については、大いに首肯される。兼好は強固に自身の発言を主張しようとして述べたのではなく、聞こえなくてもよいという様子で、つぶやいた。そして、それが偶然、前方の見物人たちにも納得されたのである。

すると残る問題は、なぜ兼好は、場違いのつぶやきをしてしまったのか、ということである。兼好自身も含めて、その場に集まった人たちは競馬を見物しようとしていたのだから、見物で日を暮らすのは愚かである、などと言うのは、相当に空気の読めない発言である。それが、たとえ大声で主張されたものではなく、つぶやくように言ったとしてもである。

そこで、少し視点を変えて、この時の樹上の法師の見物態度について考えてみたい。法師は、他の見物人を差し置き、自分だけ高いところから見物をしようとしたのだった。法師でありながら、世俗のイベントに現を抜かし、あまつさえ自身だけよい思いをしようという利己心から木に登ったのである。そして、そこに

座り見物するも、居眠りをし、今にも落下しそうな時に目を覚まし、また眠るという滑稽な有様であった。見物人たちも愚か者だと嘲ったのである。ただ、この時の見物態度については、見ようによっては、兼好の庶幾した態度と通う面があったとも言えるのではないだろうか。

法師の様子は見物人から「世のしれものかな。かく危き枝の上にて、安き心ありて睡るらんよ」と言われていた。危うい木の上であるが、心安らかに眠っていたのである。さて、兼好は『徒然草』第一三七段で、祭事の見物態度について次のように述べている。

さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。「見事いと遅し。そのほどは桟敷不用なり」とて、奥なる屋にて、酒飲み物食ひ、囲碁・双六など遊びて、桟敷には人を置きたれば、「渡り候」と言ふ時に、おのおの肝つぶるるやうに争ひ走り上りて、落ちぬべきまで簾張り出でて押しあひつつ、一事も見洩らさじとまぼりて、「とあり、かかり」と物ごとに言ひて、渡り過ぎぬれば、「また渡らんまで」と言ひて下りぬ。ただ物をのみ見んとするなるべし。都の人のゆゆしげなるは、睡りていとも見ず。若く末々なるは宮仕へに立ちぬ、人のうしろにさぶらふはさまあしくも及びかからず、わりなく見んとする人もなし。

田舎者は僅かにも見逃すまいと必死に見物しようとするが、都の上品な人は、眠っているようで無理に見ようとはしない。兼好が庶幾したのは、ものごとに執着しない、余裕のある態度であった。すると、『徒然草』第四一段の法師の様子は、もちろん自分だけ人混みを避け、下世話な動機から木に登ったのであるが、しかし、見物の際には、居眠りをして執着していない。都人の態度と通じる面があるとも考えられるのである。

すると、兼好は以上のような見物態度もあり、樹上の法師を少し擁護したいという気持ちを起こしたのではないか。田舎人の見物態度よろしく、余すところなく貪欲に競馬を見ようとする見物人たちが、執着しない態度とも言える法師を罵倒していた。それゆえ、兼好は小さな反発心を起こしたのではないか。そして、多少皮肉を込めて発言したのではなかったか（もちろん自嘲も込めて）。発言は、言ってみると場違いのものであり、イベントを自身も含めて楽しみに参集した者の発するべきものではない。兼好がこのような空気の読めない発言をしたのは、自身の庶幾する見物態度とも通う法師を擁護してのものだったと考えられる。もちろん、そのことを大声で主張したり、見物人たちを糾弾したりする意図を持っていたわけではない。しかし、深層心理では、見物人への軽い反発の意識もあったのではないかと考える。

おわりに

本稿では、『徒然草』第四一段について、棟の花の中に眠る法師が、紫雲に乗り往生を遂げる聖のようにイメージされたことを指摘した。それが兼好に「生死の到来」という問題をつぶやかせた由縁であり、見物人にも納得されたのである。また、樹上の法師の見物態度は、居眠りをして、見物に執着していないとも捉えられ、兼好の庶幾する見物態度と通じる面があった。そこで法師を非難した見物人たちに、軽い反発心を抱いた故、法師を多少擁護するような気持ちでつぶやかれたものだと考えた。

本段は兼好の体験の形で記されている。虚構ではないかともされてきた章段であるが、やはり、同様の経験はあったものと考える。樹上で法師が居眠りをするという状況が特異なものであるが、それ故に展開した話である。そして、その時の視覚的なイメージを持たなければ、正しく読解できない章段だったのである。『徒然草』に限ったことではないが、テキストからその場面のイメージを思い浮かべることは重要なことであり、『徒然草』の他の章段についても同様の再検討が必要かもしれない。これらは今後の課題としたい。

※『徒然草』本文は小川剛生氏校注、角川ソフィア文庫『徒然草』（KADOKAWA・二〇一五年・底本 烏丸本）によった。

※引用のテキストは次のものによった。

『徒然草句解』国文学研究資料館所蔵、『景徳伝灯録』大正新脩大蔵経・第五一巻、『沙石集』新編日本古典文学全集五二・小島孝之氏校注・小学館・二〇〇一年、『枕草子』新編日本古典文学全集一八・松尾聡氏、永井和子氏校注・小学館・一九九七年、『平家物語』新編日本古典文学全集四六・市古貞次氏校注・小学館・一九九四年、『日本往生極楽記』日本思想大系七『往生伝・法華験記』井上光貞氏、大曾根章介氏校注・岩波書店・一九七四年

※引用文中の傍線は稿者が附したものであり、適宜表記等を改めた部分がある。

注

（1）例えば、白石大二氏『評釈国文学大系第八 徒然草』（河出書房・一九五五年）、細谷直樹氏「兼好の直接体験を記し付けた章段に見当る不自然な内容について」（『方丈記・徒然草論』笠間書院・一九九四年所収、初出『国語国文』四三―十一・一九七四年十一月）など。

（2）稲田利徳氏「「徒然草」の草木をめぐって（下）」（『徒然草論』

笠間書院・二〇〇八年所収、初出『岡山大学教育学部研究集録』四七・一九七七年七月）

（3）安良岡康作氏は『徒然草全注釈』の本段解説において、『実躬卿記』を参照すると、当時、競馬は五月一日に行われるのが通例となっており、本段で兼好が「五月五日」と断わっていることに意味があるとされた。そして、同記から永仁三年（一二九五）には例外的に五月五日に行われており、この日の出来事だと推測され、そうすると兼好は約一三歳の若年であったと考証された。

これに対し、齋藤彰氏は、『実躬卿記』から賀茂競馬の記事を探すと、永仁三年以外にも五月五日に行われていた例を見出すことができ、永仁三年に限定されるものではないとされた。そして、可能性として、正和二年（一三一三）を想定された（「徒然草の成立過程と構成意識 ―諸縁放下と才芸尊重―」『徒然草の研究』風間書房・一九九八年所収、初出「徒然草の考察 ―諸縁放下と才芸尊重―」『中世文学』二一・一九七六年）。

（4）鳥窠禅師の逸話は、他に『樂邦文類』『佛祖統紀』『釋氏稽古略』『宋高僧傳』などに見える。

（5）陸晩霞氏「樹上法師像の系譜 ―鳥窠禅師伝から『徒然草』へ―」（『日本文学のなかの〈中国〉』勉誠出版・二〇一六年）

（6）中野貴文氏「つぶやく兼好 ―世継との交錯」（『徒然草の誕生』岩波書店・二〇一九年所収、初出「つぶやく兼好 ―第四一段小考」『東京女子大学日本文学』一一二・二〇一六年）参照。

（7）第一〇段では、小坂殿の棟に縄が張られていたのを見て、西行と徳大寺実定の逸話を想起している。この逸話は『古今著聞集』第一五宿執（四九四）にも見える。兼好が『古今著聞集』を披見していたかは分からないが、当時知られていた逸話だと考えられる。詳しくは拙稿「『徒然草』第十段再考」（『百舌鳥国文』二五・二〇一四年）参照。

（8）安良岡康作氏『徒然草全注釈 上』角川書店・一九六七年

（9）三木紀人氏『徒然草全訳注㈠』講談社・一九七九年

（10）稲田氏前掲注（2）論文。

（11）『新古今和歌集』一九二九番歌の解釈は、新日本古典文学大系一一『新古今和歌集』（田中裕氏・赤瀬信吾氏校注・岩波書店・一九九二年）による。

（12）千々和到氏「仕草と作法 ―死と往生をめぐって―」（『日本の社会史 第八巻 生活感覚と社会』岩波書店・一九八七年）

（13）小松茂美氏編集、続日本の絵巻2『法然上人絵伝』中（中央公論社・一九九〇年）。図1も同書による。

（14）僧形の人物が紫雲に乗る図像は他にも見られ、東京国立博物館蔵「法然上人伝絵巻」でも、紫雲に乗った法然が、弟子の夢に現れている。また、阿弥陀来迎図では、雲に乗って降臨する聖衆が描かれる。

（15）『徒然草』には、往生伝は『往生拾因』しか見えないが（第四九段）、兼好は僧侶として多くの往生譚に目を通していたものと考えられる。稲田利徳氏「兼好と往生譚」（『徒然草論』笠間書院・二〇〇八年所収、初出『国文学攷』九〇・一九八一年）参照。

（16）橘純一氏『正註つれづれ草通釈』上（瑞穂書院・一九三八年）など。

（17）中野氏前掲注（6）論文。

（いけがみ　やすゆき・京都橘中学校・高等学校非常勤講師）